

震災から5年

## 「変わらぬ想い、 そして 絵手紙との出会い」

念願かなって神戸に戻り、あの震災から5年の月日が流れました。

神戸に戻って感じたこと、それは被災地神戸でも、県外に避難していた方がいたことが知られていなかったということでした。

そのような現状を心で受け止めながらも、新しい地での生活もだんだんと落ち着いてきました。

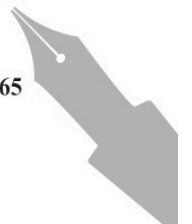
住居が「シルバーハイツ」だったこともあり、たくさんのボランティアが入って教室なども開かれていたので、夫婦そろっていろいろなものに参加し、持ち前の好奇心と器用さを発揮していました。

その中の一つで、一番熱心に取り組まれていたものが「絵手紙」です。

もともと写真を撮るのが好きだったのですが、いろいろな題材を上手に絵手紙にされ、全国の絵手紙友達や私たちにいつも季節のお便りを届けてくださいました。

もともと弱かった視力が体調を崩すごとに徐々に落ちていき、メガネや拡大鏡を使い、相当な時間と集中力を費やして一枚一枚書き上げられていたそうです。

その絵に、その言葉に、私達は何度も励まされました。



## それぞれの5年—

# 希

「両親を失った悲しみを乗り越えたい」「これから復興の本番」。神戸新聞社が呼び掛けた震災五年の日記募集に、読者からさまざまな思いが寄せられた。多くは被災者からだが、被災地外からも心温まる便りがあった。この五年、被災者が歩んだ道のりは決して平坦ではなかった。手記からも、生活の再建、心のきずなを求めて苦闘してきた姿が浮かぶ。そして、五年の節目を迎え、新たな世紀に、この経験を伝え残したいとの願いが込められている。応募の中から、十八人の手記を紹介する。

(文中敬称略)

## 県外避難者の声に耳を



県外での避難生活を振り返る西田公夫さん(右) 夫妻—神戸市北区山田町下谷上

### 西田 公夫(74)

北区・無職

「おたくどこの仮設か してん」「来はったん?」「仮設ぢやいませねん。その人のげんな面持ちに、調べてみると、私が引識はなく、存在すら知らな

つ越した復興住宅に住む百所帯近くの多くが、県外へ私たちが震災の日から避難所で暮らし、仮設住宅の募集でもはずれ、やむを得ず神戸を離れた。

不十分なながらも被災地には施行された支援策も、私たちに適用されず、二年近くも放置されてきました。公営住宅の二元募集も、落選し続け、悲嘆の涙に暮れた人も多くいました。

情報不足の中、慣れぬ土地で話し相手もなく、時には雑言に耐えながら、一日千秋の思いで帰る日を待ち続けた私たちの実情は、被災地には伝えられていなかったようでした。震災の検証でも県外への避難者のごとに言及された方はおられなかったように見受けました。今後大災害が発生したとき、私たちの職(てつ)を踏むことになるのではと懸念します。

今なお、県外からポツリポツリと帰ってこられる人のあることを知ってください。



晩年の日々

## 「出逢いは宝、 毎日を大切に」

公夫さんは、神戸に戻って以来、年を重ねるごとに体調を崩すことが多くなっていました。

その度に目や耳は弱くなり、また、震災後に発症した肺気腫によって、在宅で酸素を使いながらの生活となりました。

体の調子の良い時には、絵手紙を書いたり、ベランダにある花のお世話をしたりして毎日を過ごしました。

お二人が神戸に戻ってからは、当時の学生や卒業生らが神戸に遊びに行ったり、手紙のやりとりを続けていました。

公夫さんは、このような「孫」たちとの交流をととても楽しみにしてくださり、またそれらの出逢いを「宝」として、お付き合いしてくださいました。

公夫さんと過ごした時間は、私たちにとっても大切な「宝物」として、いつまでも心に残っていくことでしょう。

## 素晴らしい 孫との出逢い

いま私の家には、1m余りの長さの、カラフルな千羽鶴が飾ってありますが、これは昨春体調を崩した妻を気遣った孫達が、一日も早い回復を願って作ってくれたものです。

震災で愛知県へ避難した私は、縁あって名古屋のあるボランティアの会に入り、「震災の語り部」をしてきましたが、酷い難聴のため質疑応答などでの適切な対応ができず難渋しました。

ところが当時被災地支援のボランティア活動を続けていた女子大生がこれに気付き、数名が交代でアシスタントとして私の側に付き添い、サポートしてくれるようになりました。

これが機縁となってお互いの親密さが深まり、交流の輪はその後輩にまで広がりました。そして彼女達が私達の孫になるという意味は、帰神時の引越しの荷造りや新居での荷解きの手伝いに、十数名もが押しかけるという形で現され、私や近隣の人達を驚かせました。

その後も交流は続いており、折りにふれて送られてくる便りには、ボランティア活動の報告などと共に私達への思い遣りの言葉が綴られています。また所用で来神した際には必ず立ち寄り、大人数の場合は「しあわせの村」に、数人の時は私の家に泊って行きます。先頃にも「夏休みに淡路花博へつれていってあげる」との寄せ書きがFAXで届きました。

彼女達の明るい笑顔や振舞が、無上の慰めと励ましになったことは言うまでもありません。

子供のいない私達に、このような素晴らしい孫達が授かったということは、出逢いの不思議さともいえるでしょうが、お互いの「まごころ」が通じ合った結果だと信じています。

2000.9.4 兵庫県高齢者放送大学  
東灘友の会 しん第6号



2005.12 有馬温泉にて、公夫さんの傘寿と、敏子さんの誕生日お祝いを孫たちと。

## 孫が出来た

西田公夫 (80歳 神戸市北区)

「おじいちゃん、おばあちゃん、お元気ですか」受話器から明るく弾んだ孫娘の声が聞こえてきました。と、こう書くと、私達のことをよく知っている人は「子供もいないのになぜ孫が」と不審に思われるでしょう。

しかし、いるんです。孫だけでなく、曾孫までも。

未曾有といわれた激震に、家は倒壊、私達は身一つで救出され、その日から避難所暮らしを余儀なくされました。

やがて仮設住宅の建設が始まりました。高齢者優先の言葉を信じて数度応募しましたが、あえなく落選。あまつさえ体調を崩したので、やむなく妻の弟夫婦が住む名古屋市の近郊に移りました。

幸いその街の県営住宅に入ることができ、生活に落ち着きが戻ったかに見えましたが、不透明な先行きに内心は不安が一杯でした。

被災地の行政は、その数十万といわれた県外避難者の実態調査を行おうとしないばかりか、私達の問い合わせに「県外へ出られた人は恵まれている」、「勝手に出て行った人の面倒まで見られへん」とのつれない返答。

行政に見捨てられたとの思いは募るばかりでした。

情報不足の中で先行きを模索しながら1年経った早春のある日、被災地を支援するボランティアの会の人と知り合い、その人の勧めでその会に入り「震

災の語り部」となりました。会の活動の中心は若い人達で、特に高校、大学の学生の姿が多く見られました。

彼らの自信に満ちた活発な言動は沈みがちだった私の心に、若さと勇気を与えてくれました。

「語り部」として招かれた会合に出ましたが、すでに目と耳が不自由だった私は質疑応答となると困りました。それを知ったボランティアの女子大生が目となり耳となってくれたので大いに助かりました。

紆余曲折もありましたが、多くの人の温かい支援を得て、県外避難者の会を立ち上げることができました。そのときも世話人の私をサポートするために、一人の女子大生が専属についてくれました。このように陰に陽に援助してくれた彼女たちのおかげで私は任務を全うすることができました。しかし私の方から彼女たちのためになることをしてあげたいという記憶はありません。

この彼女たちが後に私達の孫になると宣言してくれたのです。

愛知県へ転居して2年目の春、義弟が勧めてくれたシルバーカレッジに合格し通い始めました。ここでは被災者としてではなく、普通の人として学友達と交流することができ、本当に心のケアになりました。親しくしていただいた人とは卒業後も交流を続け、神戸へ帰った現在も2、3の人と文通しています。

カレッジを卒業後は国の放送大学の

愛知教室（中京大構内）に通い、1年間歴史考古学を受講しました。知識を吸収したいというよりも、絶えず何かを考え多くの人と交わって胸中の不安を消してしまいたい、との思いが強かったのですが、彼女たちには、震災に遭いながら常に明るく勉学に励む年寄りが見えたのでしょう。

また、避難者の会の代表となつてからは、多くの新聞社、テレビ局の取材を受けるようになりました。なぜ私ばかりがメディアの人達に取材されたか、今もって疑問に思っていますが、テレビや新聞で私のことを見た彼女たちの目には、私が特異な存在に見えたのでしょうか。

公営住宅の第三次一元募集で市住に当選し、神戸へ帰ることになった前日、荷造りに女子大生が3人来てくれました。翌日には予想もしなかった男女16人が押しかけ、手渡しで荷物をトラックに積み込み、近所の人を驚かせました。

それだけではありません。神戸に帰っても私達老夫婦二人だけでは荷解きに困るだろうと9人がワゴン車等に分乗して新居まで来てくれました。

3年半も経つとボランティアで活躍するメンバーも変りました。社会人あり学生ありで、その中の7人が孫になる約束をしてくれたのです。

4年前、私が誤嚥性肺炎で入院した時、学生だった3人が急遽見舞いに来てくれたり、ルミナリエを見に連れて行くためだけにわざわざ来てくれました。

今は皆が卒業しそれぞれ福祉施設等

で働き、その中の3人が結婚し、可愛い子供に恵まれました。曾孫です。

震災で家や家財などを失いましたが、今では孫という素晴らしい宝物に恵まれています。

「休暇が取れたから泊まりに行きます」

受話器から孫娘の嬉しそうな声が聞こえてきます。

私達の心の若さの秘訣は、孫の存在です。

2005. 1. 17 阪神大震災を記録しつづける会  
「阪神大震災から10年 未来の被災者へのメッセージ」



2005. 12 有馬温泉旅行に出発する前のコマ。自宅にて。

# 3年間愛知で避難の老夫婦



愛知県で避難生活中に出会った人たちの写真を手に、当時を振り返る西田公夫さん、敏子さん夫妻。神戸市北区の自宅で

## 孫との出会い 支えに

### ボランティアの元学生ら

阪神大震災で被災し、愛知県で避難生活を送った神戸市のお年寄り夫妻と、名古屋市の元学生ボランティアが長く温かい交流を続けてい

## 今も神戸で続く交流

カ月後に同県新川町(現清須市)の県営住宅に移り、約三年を過ごした。敏子さんは双眼鏡で岐阜の山を眺め、六甲山を思った。県外被災者に行政情報は届かず、「棄民」。はつきりそう思いました」と公夫さん。震災二年後、愛知に住む被災者が集う「りんりん愛知」代表となり、ボランティアとして寄り添う若者たちが、孫に映り始めた。一九九八年、ようやく神戸の高齢者向け災害復興住宅への入居が決まった。「あまりな山の中。子どもの声すらしない」。孫たちは案じ、一年に数度、今も休日に愛知から出向き、話をしたり掃除をし、時には泊まる。災害ボランティア組織「レスキューストックヤード」(名古屋市中種区)事務局長の浦野愛さん(七〇)もその一人。「神戸に戻ったからといって、私たちの事情だけとかかわりを捨てたくなかった」

「愛知の桜はきれいだった」と敏子さんが懐かしむ春に合わせ、「孫たち」は老いに直面する夫妻を名古屋へ招き、ゆかりの人たちと再会してもらった計画を立てた。公夫さんは肺気腫、敏子さんは不整脈に苦しむ。体調を不安視する二人を昨年十二月、その練習と称し兵庫の温泉へ誘った。「傘寿、お誕生日、おめでとー」。こっそり準備した祝い幕を披露し、驚かせた。

## 阪神大震災から11年

震災ですべて終わっても仕方なかった。でも生きていてよかった。「出逢いは宝」と夫妻はうなずき合う。二人の部屋の写真立ては「孫たち」の笑顔で埋まっている。

## 災害復興とは人間復興、 それは被災者と支援者が共に救われること

真宗大谷派玉龍寺住職  
五百井 正浩



出逢いから2年。わずかな期間でしたが、西田公夫さんには本当に大切な事を学ばせて頂きました。ありがとうございました。

災害復興とはなんだろうか。

もちろん建物や道路を整備し、都市機能を回復する事もあるけれど、先ず、そこに生きている人のつながりをより戻し、その人の生きてきた世界を元に戻す事ではないでしょうか。つまり、復興とは一人ひとり違うものです。その先は、今までの良いものは継続しつつ新たな文化を被災者自身が作っていき、他者（ボランティア等）はそれを支援し、支援から交流になっていく。親しくなった人が寄り添い、「あなたは一人ぼっちじゃないよ、あなたは見捨てられていませんよ」というメッセージを伝える事だと思います。

共に涙を流し、つらさ悲しさを分かち合い、時間をかけて受け止めていく。その事が被災者の生きる意欲を取り戻すことにつながっていく。その機縁として物資を届けたり、炊き出しや足湯等を行い

五百井 正浩（いおいまさひろ）

1986年8月玉龍寺入寺。1991年4月玉龍寺住職。阪神・淡路大震災の時、神戸市長田区で被災。2000年12月、1995年8月に真宗大谷派（東本願寺）が設置した4つの現地拠点を統合し、「ネットワーク朋」として活動を継続していく事になり、その代表に就任。真宗大谷派玉龍寺住職・西神戸被災者懇談会副会長・阪神淡路大震災被災地10年を検証する会世話人・震災を語る会主催等を務め、現在に至る。大学の同級生である栗田暢之を通して公夫さんとお出会う。葬儀では助音を務めた。

ます。先ず出会った被災者に「人のぬくもり」を伝え、そこに足を運び続けてやるべき事を見出していく。そこに人とひとが結びつき、「信頼」という精神的エネルギーが双方に蓄えられます。

よく支援者（ボランティア等）を偽善と言われる方がいらっしやいます。被災者と支援者との距離が近くなり、関係が深くなれば、同じ行為でもそれは偽善から自然な姿に映っていくのでしょうか。被災者一人ひとりの救いは、関係性（社会）の救いでもあります。

西田御夫妻と名古屋の孫たちは、「お互いの存在そのもの」を、「そこにいてくださる事」を共に尊敬



されています。そこには共に救われている姿があります。救いとは一括りに言う事ではなく、被災者と支援者一人ひとりが「もう一つの生き方」という課題を積み重ねていく過程そのものではないでしょうか。

それぞれがお持ちの願いは、その人が亡くなるまでの課題でもあります。その表現が西田公夫さんにとっては『絵手紙』であり、『語り部』でありました。そこには様々なつながりと時間の流れと表情があります。

自分の傍らにある、小さな信頼

できる人間との関係、あるいは銘木自然の美しさや、その中に生を受けて生きている事の喜びをかみしめながら、もう一度、自然がもたらす不幸にもかかわらず、人間の社会は良いものであるといえるように関わり続け、精進し、そしてお互いの人生を荘厳していきたいものです。

「いのちは大切だ。いのちを大切に。そんなこと何千何万回言われるより、『あなたが大切だ』誰かがそう言ってくれたら、それだけで生きていける」



あとがき

## 「迷ったときはいつも」

特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事 栗田 暢之

『ああ、栗田さん。いつもありがとう。』と、シルバーハイツにお邪魔するたびにやさしい笑顔で迎えてくれた公夫さん。出遭って13年。僕は「被災者」の公夫さんしか知らないが、その何倍もの年月をすでに生きてこられた人生の大先輩である。

『神戸は戦争で焼け野原になった。大変な時代だった。復興復興で一生懸命働いて、やっとここまでできたと思ったら、震災でまた焼け野原になった。私たち庶民にはいずれも国は何もしてくれなかった。』この言葉は公夫さんを「被災者」という枠組みでは捉え切れるはずもなく、しかも僕のような青二才にはその重みを到底理解できない。しかし公夫さんとお付き合いさせていただく中で、それは本当に国を憎んだ言葉ではなく、「生活者の視点でもう少し丁寧にと人に接しなさい」という忠告だったと感じている。

戦争という激動の時代を必死に生きられ、さらに晩年に震災という修羅場と向き合われた公夫さんである。その真意は「苦しいときこそ一人ひとりを思いやれ」とい

う人生の年輪から絞り出された遺訓だったのだと思う。それは、一人ひとりに届けられる絵手紙から、また震災当時から支援し続けている「孫」たち「ひ孫」の名前まで一人ひとりしっかりと記憶されていたこと、そして『震災ですべてを亡くした。でも、震災ですばらしい孫たちに出会えた。私たちは世界一幸せだと世界中の人に大声で叫びたい。』と言われた公夫さんの生き様そのものが、人としての生き方を僕らに問うメッセージだったのだ。

3年ぐらい前だろうか。『もういつ逝ってもおかしくない。最後のお願いは栗田さんに吊って欲しい。』と僧侶でもある僕にそっと耳打ちされた。そしてあの日、悔しいけどその約束を果たすことになる。しかし、訃報を聞き駆けつけた多くの孫たちを含め、本当に「丁寧に」その死と向き合った。みんな学んでいたんだと感じた。

迷ったとき、苛立ったとき、このメッセージを思い出そう。脳裏に鮮明に焼き付いたあのやさしい笑顔とともに。